

冴えない俺が美少女Vの中の人!?

イケメン配信者に凸られてこのままでは独占されそうな件

characters

saenai ore ga
bishojo V no
naka no hito

本郷 伽依

登録者百万人を
超える超人気配信者。
生身の姿で
ゲーム系の配信を行う。

永戸 遍

映像・音楽に長けた
裏方クリエイター、のはずが
美少女Vとしてデビューした
アラサー男性。

八女 川

永戸の友人にして、
Vライブプロジェクト
「TOF」の代表。

沙 門

永戸が憧れるV。
所属事務所が廃業し、
フリーになった過去がある。

トニー・沈

通称トニシン。
レイネの同期で、
歌を得意とする配信者。

レイネ

永戸が演じる美少女V、
通称モス子
デビュー配信がバズって
一躍人気者に。

プロローグ 寝耳にバズ

昨晩は本当に散々だった。一生分の羞恥を味わったと思う。やるべきタスクは山積みだったが、もう人生のなにもかもに向き合っていられなくて、ふて寝したのが夜十時。

けたたましい着信音で、まだ日も昇っていない早朝、叩き起こされた。世界ってこんなにも優しくないことあるんだな、などと思いつながら、親の仇のように応答をタップする。

『おい、おい!! 大変なことになってる!! トレンド、ツブックスの!! 早く見ろ!!』

「なんだよこんな時間に……寝てんだよこっちは、そっとしておいてくれ」

『いいから、早く!!』

寝起きというだけでは説明できないカスカスの喉にもお構いなしに、薄情な奴め。

ゴンゴンと咳払いし、仕方なく通話をブチ切り、「TBookS」(主にオタクたちが生息する魔境こと国内最大手のSNSだ)のアプリを起動。言われた通りにトレンド欄を開いてみる。

「えー……日本の、トレンド。カテゴリ、バーチャルライブストリーミング……レイネ・モスコミュール……?」

ネット配信業界において一定の市民権を得つつある、バーチャルライバー・ストリーマーコンテンツ。

二次元の魅力的な老若男女……時に人間の似姿に留まらないが……の立ち絵を、イラストを立体的に動かすことのできるアニメーションソフトや、3D化した立体モデルを用いて、現実の人間の動きや表情と連動させ、動画投稿やゲーム配信といったエンタメを発信する際のアイコンとする活動形式で、今やその活動人口は一人を超えられている。トップ層の活動者ともなれば、金の盾保持者……チャネル登録者数、百万人の大台に乗ることも、決して珍しくない。

彼らの存在はバーチャルの頭文字から取った「V」を俗称として、ソーシャルネットワークの一部界限では広く親しまれており、それだけに、こうしてSNSのトレンドにその活動者名が載ることも決して珍しいことではない。そうなのだが。

一気に目が覚めた。レイネ・モスコミュール。その名前は、つい昨日、新規Vライバープロダクション所属のタレントとしてデビュー初配信を行った新人女性Vライバーのもの。

当該イラスト立ち絵モデルを用いて活動するはずだったタレントが、あろうことか直前になって音信不通になり、急遽、事業立ち上げに社員として関わっていた裏方の俺が、ヤケクソで女声を出して代役を務め、散々な結果に終わったはずの、出来立てホヤホヤ現在進行形黒歴史そのものの名前である。血の気が引いた。レイネ・モスコミュールが所属するバーチャルライバープロジェクト『ティル・オブ・フィアラル』、通称『TOFプロジェクト』は、約二年の準備期間の末、ようやくローンチまでこぎつけた事業だ。

こういった新規のエンタメ事業において、なにを差し置いても、とにかく滑り出しというものが肝要になる。それを、まさか、やむにやまれぬ事情があつたとはいえ、俺の不手際で、炎上スタートなんて

事態に陥っていたら。

これまでの努力は水の泡。今までお世話になったプロデューサーの顔に泥を塗ることもなるだろう。その上、事業立ち上げにあたり融資を受けるため、親から相続したこの家を担保にしたから、たちまち家なしニートに成り下がってしまうかもしれない。

考えつく限り最悪の展開に頭の中を支配されながら、震える指先でトピックをタップ。

すると、とある切り抜きツイートが話題の投稿としてトップに上がってきた。

切り抜きとは、長時間にわたる配信の見どころを有志視聴者がピックアップして字幕やカットなどの編集を加えた動画だ。見出しは、「大型新人モス子襲来」の一言だけ。そのツイートに、数千のリブート（アカウントをフォローするユーザーのタイムラインに再投稿する機能だ）と万超えのいいねがついて拡散されている。

「は……？」

まさか、レイネ・モスコミュールの名前の次にトレンド入りしていた「モス」は、有名ハンバーガーチェーン「モンスーンバーガー」の略称などではなく、俺がその場しのぎで使った自己（事故）紹介の「モスモース！ モス友のみんな、はじめまして！ TOF所属新人Vライバー、レイネ・モスコミュールです！ ちなみに大好物はマクナルティバーガーのビッグチで〜す」というクソくだらない文句から取られたものなのか？ 勝手にモス子ってニックネームが浸透してるし！

その後もスクロールして話題のツイートを漁っていると、昨日の今日ですでに某バーガーチェーンのCMを流用してレイネの音声を面白おかしく切り貼りした音MADだとか、V界限のお家芸とも言える、

名作アニメのオープニングテーマ曲を編集して、視聴者の叫びを好き勝手代弁させる胡乱な動画「モス子マン」だとかが出回っており、本当に意味のわからない事態へ発展していた。ネット社会の恐ろしさというものに初めて当事者意識を持った瞬間である。

「どういうこと……?」

呆然と外を見る。カーテンを透過する朝日。ついさっきまで暗闇だったはずなのに、いつの間にか、日が昇って、昨日となら変わらない街の姿が露わになっていた。

静かな部屋のなか、再び着信音が鳴った。プロジェクト立ち上げにおいてアドバイザーになってくれた音楽プロデューサー、岩峰マオ先生からだ。

「お疲れ様です……」

『永戸くん！ ツブックス見たよ！ レイネって子、すごい反響じゃない！ なかなか艶があつて特徴的な声だし、掴みは上々ね！ このまま固定ファン増やしていけばうちのレーベルで歌手デビューするのも夢じゃないよ！ 頑張って！』

「岩峰先生、あのですね……さてはわかっておっしゃってますか？」

『うん？ なんの話かな？ まあ、声帯のケアは欠かさないようにね。誰のとは言わないけど』

「……は伊ッ、ゲホッ」

間合いを見計らったかのように、盛大に裏返る声。勢いよく噴き出した笑い声とともに通話が切れた。岩峰先生は直前のゴタゴタに居合わせており、レイネを担当するはずだった子がいなくなったことも知っているのだ。誰が代役を務めたかは報告していないが、俺の声だとすぐさま見抜いたのだろう。恐

ろしい人である。

というか、なんとか初配信だけ乗りきつてあとは適当なところで代役を立てるなりフェードアウトしようという方針だったのに、どうしてこんなことになってしまったのか。

ボイスチャットアプリのダイレクトメッセージを開く。現状唯一の同僚にしてTOFの代表である友人(さつき俺を電話で起こしてきた奴だ、八女川日向から大量のメッセージが来ていた。

『マジ、ごめん。予定変更。他の子たちが軌道に乗るまで、モス子続けてくれないか』

『これだけ界限でお前の声がレイネとして拡散された以上、もう後には引けないんだ』

『モス子、TOFの柱になれ』

『一生のお願い』

ふざけんな、と叫びたくなった。しれっとコイツまでレイネのことモス子呼ばわりしていやがるし。ノリノリかよ。

とまあ、そんなわけで、どこにでもいる冴えないクリエイターである俺、永戸遍は、どこまでも不本意ながら、男の身で、レイネ・モスコミュールという女性Vライバーとしての活動を始めることになった。

まさかこれが、人生のなにもかもが塗り替えられるきっかけにすぎない一幕だとは、まったく思いもしないことだった。

第一章 身バレ

この世界には夢がある。

現代社会とズレを感じ、その歪みに取り残された者たちのオアシス。極彩色の嵐のような自己表現、社会規範からはみ出しかねないような個性の氾濫、全てがまるでモザイクアートのように混沌と調和を織りなして、騒々しくも美しい様相を呈している。

それがバーチャルライブストリーミングコンテンツの世界だ。

俺がこの世界に魅了されたきっかけは、個人勢としては今や随一のカリスマ的人気を誇る男性Vライバー、沙門くんとの出会いだった。

当時、俺は音楽系の専門学校に通う専門学生だった。通学を始めて半年経つか経たないかという頃、不慮の事故で突然両親を亡くし、遺産相続の関係であらゆる親戚とトラブルが起って、ほとんどの親類縁者や地元の友人らと縁を切る羽目になり、遺産や生命保険などのまとまった金を手に入れる代わりに、人生への意欲というものを根こそぎ失って、ただ息をするだけの日々を過ごしていた。

ベッドから出ることもできず、重い腕でようやく手に取れるスマホで開いた動画配信アプリ。その時はまだ、Vという世界について、なんか流行ってる、以上の認識はなかった。

とにかく頭を使わずに時間を潰せるものが欲しくて、その時一番視聴者を獲得していた配信を覗いた。

それが、沙門くんの「ただいま」と銘打たれた雑談配信だったのだ。

『うーん、そうだね。事務所があんなことになっちゃって、もう僕、どこの誰でもなくなっちゃったけど……こうやって今も僕の活動を信じて配信見に来てくれたきみたちのおかげで、そんな……ただの僕でもいいんだって思えるんだ。だから、何者でもない僕を、それでいいよなって、信じ続けて、これからも、未永く、みんなで楽しんでいこうって思ってるよ。ありがとうね』

自分でも気づかないうちに、涙が溢れていた。

ちやらんぼらんでるくに将来設計の定まっていけない俺を、それでも愛して、好きにやらせてくれていた親が唐突にこの世を去り、二度と会えなくなった。その上、遺産トラブルでそれまでの人間関係がほとんど無に帰した。自己形成の大部分を人間関係が占めていた俺にとって、自分を見失うには十分すぎる出来事だった。俺という人間を証明するのが自分一人しかないという事実が、恐ろしくて仕方なかったのだ。

俺がこの世界に生きている意味はあるのだろうか。壮絶な虚脱感とともに、胸の中を切り刻むような焦燥感が常に心を苛んで、外界の全てから責められているような妄想に囚われていた。

そんな俺の空虚でどうしようもない心を、沙門くんの「何者でもない自分を、それでも信じ続ける」という言葉が、みるみる癒やしてくれたのだ。

彼のことはなにも知らなかった。一体なにがあったのか、どんな目に遭ったのか、なにも。

それでも、彼の言葉には説明しようのない説得力がこもっていた。

狂おしいまでに優しく、包容力のある、落ち着いた声色で紡がれるそれが、心に深く刺さって抜けな

かったのだ。

それから俺は夜を徹して彼のことを調べた。一体彼になにがあったのか。彼はどんな人で、今までどんな活動をしてきたのか。

沙門くんは、つい最近まで、V界限でそれなりの知名度を誇る中堅事務所に所属し、主にプレイヤーの一人称視点で銃や魔法などを撃ちあうFPSゲーム配信でファンを獲得していたVライバーだった。

当時はバーチャルコンテンツの黎明期……女性Vが圧倒的な支持を得て、視聴者も男性が多くを占めていた時代だ。そんな背景もあり、男性Vの肩身が狭いなか、活動への誠実な姿勢や、取れ高に貪欲なエンタメ精神、広い人間関係で、堅実に同接（配信のリアルタイム視聴者数を示す同時接続者数を指す略称だ）を増やし、半年以上にも及ぶ活動期間の末、念願の収益化を果たした。

収益化、つまり配信活動に伴う広告収入を得るためには、登録者数や同接数、提供するコンテンツの内容など、さまざまな課題をクリアしなくてはならない。コンテンツとしては発展途上もいいところで、注目度の争奪も活動者の入れ替わりも激しいなか、その条件をクリアしたのは凄まじい快挙であり、男性Vとしては沙門くんが初だったらしい。

そんな矢先のこと。彼が所属していたVライバープロダクションの運営上層部のスキャンダルや元所属タレントへのギャラの未払いといった問題が発覚。その経緯があるとある暴露系動画配信者によってアップされ大炎上に発展し、トドメとばかりに社長の悪質な脱税や横領まで明らかに成り、その末の運営夜逃げと、考えつく限り最悪のかたちで事務所が廃業したのだ。

所属タレントは運営に散々振り回された挙げ句、悪名高い事務所のスキャンダルの矢面に立たされ、

ほぼ強制的に活動休止や引退へ追い込まれた。

そんな最中、沙門くんは事務所の元所属メンバーを取りまとめて一致団結し、契約不履行の訴えを裁判所に提出、示談交渉を行っているという声明を共同で発表した。タレントの名誉回復と、持ち逃げされたチャンネルの主導権の返還のため、奔走したらしい。

交渉の末、元運営側に全ての要求を呑ませるかたちで決着し、名誉とチャンネルを取り戻して、ようやく活動再開に至ったという壮絶な経緯があったのだ。

俺が目当たりしたのは活動再開を発表してから一発目の、いわゆる復帰配信というやつだったようだ。これからはフリーの、いわゆる個人勢Vとして改めて挑戦していくよ、という報告も兼ねた上で、あの発言だったというわけである。

知れば知るほど、俺は彼の虜になっただけだった。彼の言葉は想像を絶するほどの苦勞に裏打ちされたもので、説得力があるのも当然の話だった。

彼について解説する動画を見漁っていたら、ふいにおすすめに上がってきた切り抜き動画が目に入った。見ると知らないゲームのプレイ配信だったにもかかわらず、数カ月ぶりに声を出して笑い転げてベッドから落ちた。そのままの勢いで、三日ぶりに風呂に入ることができた。

沙門くんと事務所の同期だったという女の子の配信が切り抜かれた「今だから言うけど……」というタイトルの動画を開き、沙門くんが事務所でどんなに不遇な扱いを受けてきたか、それでも泣き言や愚痴一つ言わず頑張ってきたかということを、アンチへの怒りとともに涙ながらに語るのを見て、枯れ果てていたと思っていた怒りが驚くほどに湧き上がった。

沙門くんのツブックスアカウントをフォローしてすぐ、歌ってみた動画の予告がツブートされ、しかも沙門くんが歌うのを聞きたいと思っていた楽曲だったので、舞い上がって喜び、思わず最寄りのコンビニまで走って少し高いケーキを買った。

次の日、その歌ってみた動画がアップされた瞬間から、何度もリポスト再生してはじっくり堪能した。そして、このパートの抑揚調整、自分ならこう編集するな、沙門くんの声を生かすにはもっと……などと無意識に考えていることに気づき、そのままの勢いで学校に復学届を出した。

沙門くんのおかげで、俺はみるみる自分を取り戻すことができたのだ。今までの数カ月が嘘のような一日（と少々）だった。

沙門くんと出会ってからの俺は、それまで停滞していたものが一気に動き出すように、目まぐるしい日々を送るようになった。専門学校を卒業してから一年間必死に勉強し、四年制の芸大のデザイン科に進学、学業の傍ら、演劇サークルに所属し裏方として演出の勉強をしつつ、映像制作を一から学んだ。同時にサークルに出入りしていた絵画科の教授と意気投合し、デッサンなど絵画の基礎についてアドバイスをもらったりしながらイラストの腕も磨いていった。

そして同じV界隈のオタクとして意気投合したサークルの先輩兼飲み友達の八女川の熱意ある勧誘を受け、芸大を中退。T O Fの裏方として一蓮托生、同じ夢を見ながら二年の準備期間を経て、ついにプロジェクト始動までこぎつけたのだ。

俺を救ってくれた沙門くんに憧れて、ガムシヤラに今まで走り抜けてきた。裏方とはいえ、同じ業界で働けるのだと、期待で胸がいっぱいだった。

ゆえに、どんな手を使っても、このT O Fを出だしで頓挫させるわけにはいかなかった。

せつかくこの手に掴んだ生きがい、を、みすみす逃したくはなかったのだ。

そう、そうだ。だから、仕方ない。

あの思いがけない大バズを生み出した初配信から三カ月、今もなおレイネとして必死に清楚な女の子の声を捻り出しながら、レイネの同期であるT O F所属女性Vのレイディ・ブランシュ、同上ロサ・カルバドスの二人と、最近トレンドの協力ゲームでコラボ配信をするのも、T O Fの活動を軌道に乗せるために、必要だからやっていること。

この心を満たすのは純粹な使命感であり、活動に享樂を見出しているわけではないのだ。断じて。

『アイやーーーーっ!! モス子! ロサ姉!! 落ちる、落ちちゃう!! 助けてえ!!』

ゲームで出すものとは思えない迫真の断末魔。レイディ・ブランシュ、愛称レイディのものだ。彼女は白を基調としたロリータファッションに身を包んだ箱入りのお嬢様として、お淑やかキャラで売り出しているのだが、さっそくキャラ崩壊気味である。

「はいはいは待って待って……ちよつとロサの姉御! どんどん先行かないで!! レイディはまだ追いついてないでしょうが!! あんな情けない声出して全力でキャラ崩壊してるのにアナタなんとも思わないの!?!」

俺は操作キャラをどうにか動かして、ゲームのステージギミックに巻き込まれ崖っぷちなレイディを救出すべく、彼女の操作キャラの腕を掴む。視点を操作してもう一人のコラボ相手であるロサ・カルバドス、愛称ロサ姉に助力を求めようとすると、彼女はさっさと次のステージギミックに手を出しはじめて

おり、こちらには見向きもしない。

はんなり関西弁の、セクシーでマイペースな魔性の女として売り出しているロサ姉らしいムーブではあるのだが。彼女が今しがた手を出しているギミックは、複数人での攻略を想定されているもので、一人の力ではどうしようもない。さつさとこっちに來てほしいのが本音である。

そんな俺の心を弄ぶかのように、ロサ姉はクスリと笑った。

『未来で、待つてる』

彼女のこの一言で、すでに決壊寸前だったレディのゲラ笑いが発動。はずみでレディの操作キャラの手がツルンと滑った。危うくゲームオーバーである。

「時をかけるんじゃないよ勝手にイ!! このゲームは協力ゲーだって言っただじゃん!」

巻き起こる二人の大爆笑でピカピカ光り続ける通話ソフトのアイコン。女三人寄れば姦しいとはこのことか。まあ、うち一名はバ美味(バーチャル美少女受肉)であるが。

ああ、どうか、引かないでほしい。俺とて若い女性とお近づきになろうなんて下心でこんな真似をしているわけではないのだ。きつとそれは、この界限に一定数存在する他のバ美味Vも同様である。

そう、俺以外にも、可愛い女性のイラストモデルを用いてVとして活動する男性は確かに存在する。

そういったVは俗にバーチャル美少女受肉、略してバ美味と呼ばれ、受け入れられているのだ。

男性であることを包み隠さず、肉声のまま美少女のAvatarを運用する例もあれば、ボイスチェンジャーを使用して完全に女性になりきって活動する場合もあり、その在り方は多種多様だ。

しかしまあ、男性であることを完全に隠し、なおかつボイスチェンジャーを使わず、声帯を痛めつけ

ながら活動している俺のようなバ美味Vは特異だろう。

そもそもこの活動を始めることになった経緯が経緯だ。本来は女性タレントによる運用が想定されていたイラストモデルを、男の俺が急遽代役を務め、思いがけず続投する羽目になったわけ。

なにが言いたいかというと、このおそらく一般Vオタ男性の夢と言っても過言ではないだろう、二人の初々しい女性Vに取り囲まれてゲームをするという状況も、つくづく本意なものであり、むしろ後ろめたさを払拭しかねているところなのである、ということだ。

さておき、そんな俺を置き去りにして、配信が某動画サービス全盛期よろしく大草原と化している間にも、笑い転げるあまりコントローラーを放棄したらしいレディの操作キャラが、これまでの努力も虚しく滑落していく。

『も〜笑わせんといてよ、モス子さあん〜! フツ、レディ落ちはったやんかあ〜〜〜』

「えっ、これ私のせい? ねえ」

ロサ姉からのとんだ責任転嫁だ。思わず真顔のマジレスを返してしまう。

『フツ……マジで腹筋テロ……勘弁してよ、もお〜』

おお、ブランシュ、お前もか。どうやらここにレイネの味方などいないらしい。世知辛いことこの上ない。

「いやいやこの流れで私にヘイト向くのさすがに嘘だつてえ」

そう嘆いていると、なぜか今になって戻ってきたロサ姉の操作キャラによって俺のキャラまでレディの後追いをさせられそうになる。俺はすかさずロサ姉のキャラの腕を掴み、道連れにした。

突如ロサ姉の事件性を感じる叫び声が響き、配信のコメント欄は再び「www」や「草」の文字で埋め尽くされたのだった。草まみれとはこのことである。

「はい、まあ、そんなわけで、本日の配信はここまで……！ 覗きに来てくれた皆さん、ご視聴ありがとうございました……！」

『チャンネル登録・グッドボタン、どうぞよろしゅう頼みます……』

『それでは皆様、次の配信まで、ごきげんよう……』

急にお嬢様キャラを取り戻したレディのしおらしい挨拶に噴き出す声で、配信を締める。

ジンジンと脳の奥を苛む、心地よい疲労感。今回のコラボもなかなか手ごたえのある内容になった気がする。

『ね！ ね！ モス子！ 今日の配信同接、ピークは百超えてたっばい!!』

配信を終えた後も繋がったままの通話。スピーカーから、喜色満面の表情が浮かぶようなレディの声が響いてくる。俺も我が事のように嬉しく、ついガッツポーズ。

この二人の取れ高への嗅覚や、エンタメ精神、配信センスには目を見張るものがある。とは言え、現状TOFにおける知名度はレイネが先んじているので、二人に限らず同期みんなには、レイネとのコラボをどんどん利用して知名度を上げてほしいものだ。

『あちきも過去最高やったわ……！ さすがモス子、うちの顔やで』

追って、ロサ姉からも嬉しい報告。彼女の活動はゲームよりも、雑談や、バイノーラルマイクを使った癒やし音声を提供するASMR配信が主で、今回の配信内容は彼女についている視聴者の需要と、や

や食い違っていたはずだ。コラボを機に、幅広い視聴者層を彼女のチャンネルに引き込めたら御の字である。

「いやいや！ 二人の知名度もそれくらい上がってきたってことだよ！ 先々週出した二人の歌ってみたコラボ、もう十万再生超えそうなんでしょ？ きつとそつちで興味持ってくれた人がたくさんいたんだって」

『もう、あんさん、お上手なんやからあ……ああ、そうや、そうやったわ、まだまだ二人とはお喋りしたいとこなんやけど、これからヤメさんと打ち合わせありましてん。ほな、またコラボやろな』

ロサ姉はVのASMR配信をこよなく愛する八女川の肝入りだ。元々彼女自身に配信活動の経験はなく、八女川のスカウトによってこの業界に足を踏み入れたらしい。そんなことがあって、ロサ姉も八女川のことをヤメさんと呼びつつ、配信やASMRのいろはについて指導を受ける関係なのである。今日の打ち合わせとやらもきつとそれだろう。

『おっけ……！ また誘うね……！ 今日もありがと……！』

お嬢様キャラから解放されたテンションの高いレディの上機嫌な声。彼女の声には聞くだけで心が明るくなるような魅力があり、つい笑みがこぼれる。

「二人とも、よかったらまたよろしくね！」

ほな、失礼いたします……という声とともに、ティロリン、と心なしか遠慮がちなSE。ボイスチャット……VCのチャンネルから、先んじてロサ姉のアイコンが消える。俺も追って離脱しようとカーソルを動かした。

『あつ、そうだ！ モス子。いい加減、顔見て挨拶したいから、事務所にも顔出してよね！ ロサ姉も誘ってごはん一緒行こ！ TOF女子会！』

「う、うん……わかった……アハハ」

じゃあね、という明るい声とともに、レディもサーバーから落ちる。途端、俺はゲーミングチェアの背もたれに勢いよく背中を預け、深く嘆息した。

よかった、今日もなんとかボロを出さずに済んだ。最後の最後で冷や汗をかいたが。

レディには申し訳ないが、バリバリ会ったことあるんだよな。俺ほど事務所とスタジオに入り浸って人間はいないよ。だって社員だもん。

緩慢な手つきでVCを終了させる。キーボードの傍らに置かれたペットボトルに手を伸ばし、残りの水を全て喉に流し込んで保湿。やはり二時間を超えると喉がボロボロだ。飲み込むたび、鈍い痛みが喉全体に走る。ゴンゴンと咳払いをして、トローチを口に投げ入れた。

配信が終わって三十分後には八女川との打ち合わせだ。それまでに進捗の確認と細かいタスクの消費。やることは山積みだ。しかし、それだけに、生きているという実感もひとしおだった。

今日の配信は取れ高的にも手ごたえがあった。切り抜きポイントも大いにあったし、ロサ姉とレディのチャンネルへの導線としてはまずまず上々だったのではないかと分析し、自然と口角が上がる。

先ほど二人との会話で話題に上げた歌ってみたの動画。音源のMIX……歌声と楽曲の音量バランスを整えたり、エフェクトをかけたりして馴染ませるための音声編集作業のことだ……やイラスト、オリジナルミュージックビデオの映像制作を手がけたのは、他でもない俺なのだ。なにせ彼女らも事務所も

まだ駆け出しで、クリエイターに外注する予算がないのである。

同期としても、俺としても、彼女らのサポートができるというのは実に役得であると思う。いざレインネのことも追い越して、このバーチャルの世界に大きく翼を広げてほしいと願うばかりだ。俺はそのために喉と羞恥心を生贄にしてレインネを続けているのだから。

まずは、現状俺を含めて五人在籍しているTOFタレント全員の収益化を目指して。ゆくゆくは二期生やそれ以上にメンバーを増やし、たくさん夢が羽ばたく手伝いができたら、と思う。

メールを確認し、優先度に応じて順番に返信する。明日は社員として、レインネの同期である歌唱特化男性V、トニー・沈……愛称トニシンとのアポイントがある。彼のチャンネルで次に投稿する歌ってみた動画のサンプルと、事務所からリスナー向けに販売しているテーマボイスの新作収録のために必要な資料を、漏れがないか再度確認。彼はやや時間にルーズ、かつ忘れっぽいところがあるので、事務所で採用しているチャットアプリにて日時をリマインドしておいた。

打ち合わせまで少し時間が余ったため、それまで切り抜きを鑑賞する。ふと、沙門くんの発言を切り抜いた、二分弱ほどの動画のサムネイルが目飛び込んだ。何度も目を擦った。

ついに俺の頭がおかしくなったのでは、と思った。

そのサムネの、沙門くんの麗しき尊顔の横に、目の部分を加工で隠してはいるもののどう見てもレインネ・モスコミュールの立ち絵が大きく幅を利かせている。

恐る恐る、震える指先でそのサムネをタップ。なんか、前にもあった気がするぞこんな瞬間。

コメント欄を開き、当該箇所のタイムスタンプと思しき時間指定の青文字をタップしてみる。すると

沙門くんのあの美声で、自惚^{うぬぼ}れでなければ、数日前にレイネのチャンネルで公開した歌ってみた動画の曲のメロディーを口ずさむ鼻歌がスピーカーから聞こえてきた。

『ん？ あ、これ？ そうそう、良い曲だよね……名前出していいかわからないから濁^{にご}すんだけどさ、あの、初配信ですごいバズってた、名前モスなのにマクナルのビグチが大好きな新人さんの歌ってみたを今ひたすらリピってて……うん、ハマっちゃった。面白いよね、あの方。あ、厳密にはバーガーチェーンではない？ ふふ、うん、そうね。ワインの名前だっけ……ん、カクテルか。失礼いたしました。お酒ミリしらがバレちゃったか』

俺は思わず持っていたスマホを放り出した。全身の血液が沸騰^{ふっとう}したかのようだった。

どうしよう、レイネが推^おしに認知されてしまっていた。俺の命も今日でおしまいかもしれない。

二の腕をさする。ザラザラとした鳥肌の質感。次の瞬間、まるで俺の錯乱^{さくらん}を嘲笑^{あざわら}うかのような着信音が鳴り響いた。

ああ、俺は、断じて、自分の欲のために、恥をしのいでレイネを続けていたわけではない。いつか推しとオープンワールド系ゲームのストーリーマーサバーとかですれ違いたいか、そんなことを夢見てこの活動に向き合っていたわけでは。

それなのに、どうして。

どうして、こんなにも、嬉しいという気持ち、今にも胸骨をへし折らんばかりの激しい鼓動^{こどう}の高鳴りがおさまらないのだろうか。こんなことが、許されてもいいのか？ 俺みたいな、さしたる覚悟もなく、なりゆきでVを始めてしまったような半端者が。

ひとまず、画面に八女川と表示された着信に応答する。開口一番、俺は八女川にこう言い放った。

「いつそ殺せ」……と。

なお、八女川からは、「死ぬ前にとりあえずお前はいい加減ASMR配信しろ」と無慈悲な言葉を賜^{たま}った。断固として拒否したが。レイネにそういった需要はない。あつても許さん。

レイネはそういう売り方だけは絶対しないのだ。俺が羞恥のあまり錯乱して、きつと放送事故を起こす。その時に終わるのはレイネだけではない。今のところTOFの知名度を担っているのはレイネなのだから。一日でも早くレイネ以外に、看板タレントを育て上げなければ。俺がボロを出して事務所ごと沈む前に。なんとしてでも、安らかな気持ちで裏方に戻りたいのである。

そんなふうに考えていた時期が俺にもありました。

「……ッ!! 待つて、待つて待つてヤバイ、無理無理ムリ無理むり!!」

加速するコメ欄。なにがあったと心配するコメントにまじり、早くも真相に気づいたリスナーがちらほらいる。

時はレイネの定例配信、数あるFPSゲームにおいて随一の人気を誇る、バトルロイヤル形式マルチFPSゲーム「A Peaks winner」……通称アペのソロランクマッチ配信、開始三十分もしない時のこと。

間違えもしない、沙門くんのプレイヤーIDが、キルログに並んだのである。

このゲームは三人一チームのパーティーが同じゲームフィールドに二十組マッチングし、さまざまな種類の武器やボディアーマーをピックアップ・強化しつつ、敵チームと戦いを繰り広げ、最後のパー

てて笑う』『情緒ジェットコースター』……そんな不躰^{ふしげ}なリスナーで賑^{にぎ}わうコメント欄。失礼、ざわつく、が正しいか。

しかし、俺の切なる祈りも虚しく、そのマッチで最後まで生き残ったのは、まさかの自パーティーと沙門くんのパーティーだった。こうなってしまったら腹を括^くるしかない。どんなに沙門くんを害したくなくても、ここで手を抜いたられっきとした利敵……ルール違反行為になるのだ。

先に仕掛けてきたのは向こうのパーティーだった。さすがは今までゴリゴリの殺意マシシキルムープで生き残ってきた精鋭だ。判断が早い。

フォーカスを向けられたのは味方野良の選択キャラ、ライブラだった。アーマーが瞬く間に割れたところをすかさずカバー、後ろに下がらせて、弾の届かない遮蔽^{しやへい}でアーマーを回復してもらった。

ありがたいことにもう一人の味方野良が挟み込むようにフォローしてくれ、なんとか相手部隊を先に一枚落とすことに成功、しかしこちらもアーマーを通り越してHPまでしつかり削れて大ピンチの激ロー、負け筋の展開だ。

ここで下がらせたライブラのスキルであるドローンで回復をもらい、なんとか生きながらえる。会心の粘りだ。しかし、アーマーを悠長に回復する暇はない、マックスまで強化したアーマーをフルで回復したライブラと、残り二人の相手パーティーに一斉突撃、一か八かだ。

アーマーが割れる音。味方の野良ライブラのものだ。仕方がない。俺も必死で味方野良とフォーカスを合わせる。バシユバシユ、と音がして、味方が二人とも落^{キル}とされた。

しかし俺もワンマガジンでなんとか相手を一枚ダウンさせる。咄^{とつさ}嗟に確認するキルログ。沙門くんではなかった。

はなかった。

つまり、認識に間違いがなければ、最後に残った敵は。

持ち武器のアボックは弾切れ。もう一つの武器はマフティス。前述の通り、沙門くんの得意武器だ。俺は息を呑んだ。配信なのに先ほどから一言も話せていない。放送事故^{おしほしごと}である。

「胸、お借りします!!」

まるで返答するかのように、マフティス特有の重い銃声が横を掠^{かす}める。俺は両目をおっぱいて歯を食いしばり、エイムを合わせた。

先に体力ミリまで削れたのはやはり俺だった。しかし、そのミリというところで奇跡的に持ちこたえ、沙門くんが銃の装填^{そうてん}に入る。その隙を突いて必死にキーを連打、ほとんど直感的にマウスをクリックする。

壮大な音楽が流れた。画面いっぱいに表示されたのは、CHAMPIONのカットイン。

味方野良から「gg」という労いのチャット。草や芝も混入しつつ、同様の文字列で加速するコメント欄。俺の頭はビッグバン。もうダメだつてワケ。

「……ハイ、というわけで。今日も配信に来てくれてありがとうございましたあ……スペチャはまた明日の配信で読ませていただきますね。おそらくアペ配信は今回で最終回になりますのでご了承ください……次回、モス之内^{のうちに}、死す。デュエルスタンバイ」

身体を横に振って待機画面に切り替える。少し間を置いて配信停止ボタンをクリック。配信ありがとアップトをする気力すらない。もう寝たい。ベッドに五体投地^{ごたいとうち}して安らかに現実逃避^{とうひ}したい。

だって俺、終生の推しを畏れ多くも撃ち抜いちゃったんだぜ。万死に値するだろ、一般サモナーとして。彼に存在を認識されることすらおこがましいと思っていたのに。

やってしまった。マジでやってしまった。どうか頼む、誰も切り抜かないでくれ。というかアーカイブ非公開にするか？　そこまで考えたところ、思考を遮るように鳴り響くメッセージの通知音。伏せていたスマホをノロノロ手に取る。

ホーム画面に表示されていたのは八女川からのメッセージを知らせるバナー。顔認証でロック解除される前にタップして既読をつけないまま内容を閲覧する。

『お前絶対さっきの配信非公開にするなよ』

これが巷で噂の思考盗聴というやつか？　なんてことだ、見損なったぞ八女川。レイネ・モスコミュールの中の人やめます。

『落ち着いたらさっさとツブックスで配信後ツブな、忘れんなよ』

更なる追撃でスマホが震える。俺は腹の底から溜め息をつきつつ、胃から熱いものがこみ上げる感覚を慰めるため唾を呑み込む。ホーム画面をスクロールしていたところ、無音のバナー通知がひよこつと顔を出した。八女川ではない。ツブックスの通知だ。

俺が当該アプリで通知をオンにしているのは、TOF公式・同期のツブートと、沙門くんのツブートの通知だけ。反射的にバナーをタップする。

「ヒエッ……」

チェアを蹴って立ち上がる。フウフウと息が上がった。ツブートの文言は、「対ありです^^」の一言

と、アットマークでレイネのツブ垢をタグつけた青文字だけ。添付された画像は、キル時のダメージログ。しっかりと、レイネのアペのプレイヤーIDが映り込んでいるものだ。

アカウントは言うまでもなく、沙門くんのもの。

俺はその場に頰れ、誰も見ていない部屋で、スマホに向かって深く土下座したのだった。

その後は記憶がない。ひとまず当たり障りのない配信終了ツブートを放流したのち、呼吸困難に陥りつつ、シンプルに「大変申し訳ございませんでした」と沙門くんに返信したことまでは覚えてる。

その後アカウントをフォローしてもらったことと、さらに「今度は味方でお願いますね」という返信をもらったことが、果たして夢か現か、自分でも区別がついていない始末だ。おそらくそのあたりでキャバオーバーをきたし、気絶するようにベッドダイブしたように思う。

次の日起きてスマホのカメラロールを開いたら、寝ぼけて撮ったらしい心当たりのないスクショで埋め尽くされていて恐怖した。全て同じ画像だ。ただただ自分が恐ろしかった。

「あれ、ナガトさん？　なんか顔色やバくないスか？　ちゃんと休めてます？」

とりあえず心を落ち着かせるためにリラックス系エナドリを三本ほどイッキして事務所へ出勤。ちょうどスタジオに入ってボイトレを始めようとしていたらしいレイネの同期、青月紅艶と鉢合わせた。おそらく顔色はエナドリックのせいだろう。

「昨日はちょっと色々あって気絶してた……気づいたら朝でハゲるかと思った」

「あー！ だから送ったメッセに既読つかなかったんすね！ よかったっすわ、マジで……さすがに過労で倒れてんじゃないかと心配してました」

「えっ、ごめん……全然気づかなかった、すぐ確認するよ」

「いやいや！ 全然緊急じゃないんで！ 三時のおやつの後くらいで大丈夫スよ！ 今日も収録よろしくお願いします！」

勢いよく頭を下げ、彼が身につけたピアスやチェーンネックレスがチャリチャリと揺れる。

青月紅艷は個性豊かなTOF初期メンバーの中で、随一の礼儀正しい好青年だ。二カッと快活に笑う爽やかな雰囲気は青春のような清涼感があり、心が洗われるようである。

そんな彼の印象とは裏腹に、配信ではややアングラな話題を取り扱う場面があり、プラットフォームのガイドラインスレスレな、ブラックジョークをふんだんに含んだ独特の空気感を紡ぐのが特徴的だ。スルメのような魅力でコアなファンを順調に獲得しており、実はレイネの次に収益化を果たすのは彼なのではないかと個人的ににらんでいる。

「てか、昨日のレイネ見ました？ 切り抜きとか片っ端からバズり散らかしてましたよね」

「……そうなんだ」

「ナガトさんのそのレイネに対してだけ塩なのどうなってるんスか？ TOFの顔っすよ。さては仲悪い？」

おっと、なかなか返答に困る質問来たぞ……仲悪いもへったくれもないしな。TOFの顔と言われて

も、それが自分のこととなるとどうにも納得いかない部分があるし、なにより自分の生き恥についてどう好意的なコメントを述べればいいと言うのか。

「いや……あの子さ、歌みたまボイスも自分で収録して音源データ送ってくるだけで、事務所に全然顔出さないから、マジで人となりがよくわかってないんだよ……マネジメントは全部八女川に任せつきりだし、なんだろ、コメントに困るよね」

「シビアっすね〜、今度ナガトさんにもちゃんと挨拶するように言っとくっすよ。俺もオフでは会ったことありませんけど、ハチャメチャなように思えて、実は真面目でガムシヤラに頑張ってる、とにかく良い奴なんだ」

「アハハ……気遣ってくれてありがとうね」

ちゃんと挨拶もなにも、顔合わせのしようがないんだよな。俺が中の人だし。

というか案の定切り抜かれて拡散されたのか、あの醜態が。とりあえずアーカイブを非公開にさせてくれなかった八女川のことは一生恨む。

紅艷くんと収録を終えて彼の退勤を見送った後、昼休憩時間で静かになった事務所内にて、しばらく編集作業をこなしていると、背後から腕が伸びてきてデスクに缶コーヒーが置かれた。

振り返ると、ニヤニヤと気色悪い面でブルタブを引く八女川。喫煙所から戻ってきたらしい。中指を立ててやりたくなる衝動に駆られて仕方なかった。

「よかったじゃねえか、推しと絡めて。これぞオタクドリームってやつだろ」

「いいわけあるかよ……俺みたいになくたびれた地味男には身の丈に合わないんだって」

「そういう奴でも夢を見られるし、夢を見ることができるとこの世界だろ。実際お前だって配信活動楽しんでんじやねえか。最近は睡眠時間削ってまで毎日杵取ってるし。飲みの付き合いめっちゃ悪くなったしさ」

「……そんなつもりじゃなかったんだけどなあ。俺みたいなのが配信楽しんでもいいのになって、ずっと考えちゃうんだよ。俺はあくまで裏方で、演者になるために努力してきたわけじゃないし……その場のぎの代役を今もズルズル続けてさ、引き際がわかんなくなっちゃったら、みつともないだろ」

元々レイネになるはずだったタレントは女性だった。リスナーだってレイネは女性であることを前提として配信を楽しみにしてくれているはずだ。俺はそんなリスナーを、生半可な覚悟のまま、今に至るまでずっと騙し続けている。

そんな状況にありながら、楽しんでいることを認めて、開き直ったらおしまいなんじゃないか、なんて思うわけだ。

八女川は天井を仰ぎ、鼻で大きく息を吐いた。ズツ、と、缶コーヒーを啜る音が聞こえる。

「まあ、さ……悪いのはお前じゃないんだし。責任は俺が取るから、全部俺のせいにして、お前は配信くらいなにも気にせず楽しんでくれよ」

つい漏れ出たような曖昧な溜め息。この男は俺が本心では欲しがっている言葉をいともたやすく吐いてしまうので、たまらなく憎いのだ。

「……言ったな？ マジで全部お前のせいにするからな。女の子とお近づきになるためにネカマやる奴が一番キショいんだぞ。俺がもし世間からそう思われて炎上しても全責任お前に被せるからな、覚悟し

とけよ」

「うわ本音出た。わかったよ、好きな男性Vと絡んで、尊い言われるためにネカマやってたのバレて炎上しても俺が責任取るって」

「俺が沙門くんとワンチャン狙って自ら望んでバメ肉したみたいに歴史改変しようとしてねえか、なあ、オイ」

その偏向報道だけは看過できねえぞ。毎日毎日恥をしのんでこれがT O Fのためになるならという一心で尊厳切り売りしてるのに、あんまりな風評被害だ。

なにがえてえだよ、裏方でまだギリ純粹にVのコンテンツ楽しめる立場だからって馬鹿にしやがってよお……なにが一体尊いって言うんだマジで！

八女川はしかし、なにを思ったか、やや顔を引き攣らせて俺の肩に手を置いた。

「ナガト……ワンチャンあると思ってなければ出ない発想だぞ、それ」

「これでワンチャンなかったらこの世に希望はねえ」

「うわ……キショ……モス子のメンバーやめます」

「八女川お前なに考えてんだよ今すぐ抜けるレイネのメンバースhipなんか!!」

「うるせえさつさとメン限でセンシティブASMR音声公開しろや！」

インフルの時よりも強烈な寒気がした。なんだこいつ、中の人が俺だってわかってるのに耳元で囁かれながら耳かきだかシャンプーだかマッサージだかされてえってのか……!? そのワンチャンのために毎月金払ってレイネのチャンネルのメンバースhip登録をしないと!? マジで意味わからん。俺なら

普通にゲロ吐くけど。付き合いが何年になっても八女川の神経構造がどうなってるのかまったく理解できない。できる気もしない。

「よししわかった、そこまで言うならめちゃうくちや過激なASMR配信してやる。全編デスボでシャウトするだけのASMRをよー！」

「それはASMRではなくASAP配信だバカタレ」

なるはやASAPで終わってくれってか、うるせえよ。

今日も今日とて八女川と掴みあいの喧嘩にまで発展しそうになったTOF事務所だが、午後から打ち合わせのアポを取っていたレディの訪れにより、なんとか紛争勃発寸前で平穏が訪れたのだった。

そして、なんだかんだ八女川のおかげで、「配信を楽しんでいる」自分と前向きに向き合うことができるようになったのも事実ではあった。

八時頃に事務所を出て、適当にコンビニに寄り、できるだけ喉に優しい食料を調達して我が家へ戻る。昨日リスナーに公言した通り、準備ができ次第スペチャ読みの配信を始めよう。

風呂に入り、飯を食べつつサムネと待機所の作成。きつと十時には始められるだろう。URLとサムネを添付し、ツブックスにて予告ツブート。

ふと、レイネのアカウントで沙門くんのホームを覗いてみる。プロフィール欄の名前の下に、小さく、フオローされています、との表記。

いいか、この際。嬉しいと思ってしまう。

黒い画面に、反射した自分の顔が目に入る。下唇を噛んでなお、つり上がってやまない口角。ほんと

うに、どこに出しても恥ずかしいオタクの顔だった。

TOF活動開始から半年が経った。

活動開始半年記念として、一期生の五人で歌ってレイネのチャンネルに投稿した歌ってみた動画が驚異のスピードでミリオンを達成し、その影響で、もともとアーティスト気質だったトニー・沈を筆頭に、レイネ以外のメンバーも注目されるようになった。

トニンはその後間もなく枠を設けた生歌配信にて多くのファンを獲得、立て続けに、それまで埋もれていた傑作歌ってみたが発掘され、めでたくも彼がレイネの次に収益化を果たしたTOFライバーとなった。

社員兼TOF専属音楽ディレクター永戸として、収録のため精力的に事務所を訪れる彼とは親交が深く、実に誇らしいことだった。

そして、トニシンの収益化達成を皮切りに、V業界でも名の知れた箱（所属するプロダクションの通称で、例えばレイネにとつての箱はTOFということになる）の人気VとFPSゲーム配信でコラボし、その切り抜きがバズったレディ、八女川の肝入りで配信したはんなり関西弁ASMRが大いに受け、固定ファンを獲得したロサ姉、面白ガチ恋ファンボーイとの攻防戦を取り上げた切り抜きがきっかけで同様のファンがゾロゾロと集まり、さらに配信の面白さが加速した紅艶くんと、次々に収益化を達成。気

づけばTOFは、新進気鋭のVライバー集団として業界雑誌で特集を組まれるまでになった。

「なあ、八女川……最初はマジでどうなることかと思っただけさ……TOF一期生全員がそれぞれ脚光を浴びて、収益化っていう一つの大きな節目まで到達できた……だからさ、そろそろいいんじゃないか、俺、裏方に戻っても」

『なわけねえだろ。登録者十万人達成を目前にしてなに馬鹿なこと言ってるんだよ。もう後には引けないの！いいから記念配信の企画案さっさと吐けオラ』

通話での打ち合わせにて、スピーカーから耳をいたぶってくる治安の悪い罵声。誰のせいでこんなことになってると思ってるんだ。無責任にも「行ける行ける！初配信を乗りきるだけのことだから！一回ぼつきり！」とか言ってる代役やらせたお前だろうが。

思わずこぼれるクソデカ溜め息。二酸化炭素がブラジルにまで届きそうな勢いである。

「ああ、もう、どうしてここまで来ちゃったかなあ……」

『レイネちゃんがオタクのコアな話をわかって一緒に盛り上がってくれる、オタク垂涎のフィクションみたいな女性Vだからに決まってるだろ。ある程度雑にイジってもいい音出すし、俺だけはこの子の可愛さをわかっている面しやすいんだ。お前は今やホモソの星なんだよ』

「鳥肌立った。その分析ガチでキショい。お前友達いないだろ」

『俺の友達の内訳、ネカマとVオタと眼鏡』

「全部俺じゃねえか」

八女川は画面の向こうでサムズアップした。実にひっぱたいてやりたくなるような腹立たしいツラ

だった。

さておき、彼の言う通り、事態は深刻である。喜ばしいことが立て続けに起きている一方で、レイネ・モスコミュールのチャンネル登録者数、十万人突破の瞬間が刻一刻と迫っているのだ。

今やすっかり俺専用の公開処刑場となっており、できればすぐにでもVの歴史から葬り去りたいネットの闇の濃縮還元みたいなチャンネルに成り果てているというのに。

どうしてか、その伸張速度は止まらないどころか加速するばかりで、もはや收拾がつかない範疇にまで及び、ド派手なデジタルタトゥーとして俺の人生に深く刻まれようとしている始末だ。

はじめから自分でVをやるつもりで活動を始め、その結果ここまで人気を得ることができたのであれば言うことはない。むしろ泣いて喜んでいたいところだ。

しかし、幾分か開き直った今でも、やはりたまに思うのだ。

俺がやっているのは詐欺なのではないか、と。

自分の女声と向き合うのは今なお慣れないし、なんなら鳥肌が立つくらいに忌避感がある。レイネを追ってくれるリスナーのみんなのことはもちろん大好きだし、いくら感謝しても足りないが、それはそれとして、恐ろしく思えてしまう瞬間がないとは言えない。

もし本当のことがバレたら。この十万人が、一斉に、裏切られたと思うだろう。当然のことだ。

そのひたむきな愛が、大きく、抱えきれないほどの愛が、憎悪に変わったら。

俺はその時、果たして耐えられるのだろうか。そう思ってしまうのである。

『半年でプロジェクトをここまで軌道に乗せることができたのは、やっぱりレイネの求心力あつてのこ

とだ』

「それはまあ、うん……」

『レイネの人気のおかげでスタッフも応募も増えたし、再来月には二期生として三人のタレントのデビューも控えてる』

「……そうだな」

『社員としての仕事はほとんどこっちに投げてくれたらいい。なんだったら契約内容を変更したっていい。TOF代表として、あえて言わせてもらう。今はお前の持ちうる全リソースでもって、レイネを頑張ってくれ』

いつになく切実で、哀切なまでの表情。俺は八女川が自分に対してここまで真剣に頭を下げるところを初めて目の当たりにした。苦いものが喉元まで込み上げる。

「じゃあ、わかった。TOFのトップがレイネである限りは、泣き言言わずに頑張るよ。けど、他のメンバーの誰か一人でもレイネを追い越したら、その時を引き際にさせてくれ」

八女川はフウと嘆息した。背負うものが増えたからか、さまざまな打算が脳内に渦巻いているのだろう。しかし、友人への情を忘れるような男ではないはずだ。

『……わかった。お前がそれで安心して活動に打ち込めるなら、そうしよう。ところで登録者十万人記念配信の話に戻るんだが、どうするつもりなんだ？ ASMRか？ それともASMRか？』

「引退」

俺はそれだけ言い放って通話をブチ切り、ヘッドホンをつけてデスクトップのモニターに意識を集中

させた。なんなんだ一体、コイツのASMRへの変態的な熱意は。しないってずっと言ってるだろ。するとしても絶対ネタに走ってやるから。後悔するぞ。

とまあ、そんなこんなでその次の週に迎えた十万人記念配信。運営からのプレゼントということで新衣装を発表し、その後は十万人になぞらえ、凸待ち十組来るまで耐久という名目で配信枠を立てた。凸待ちとかいう、VCのアドレスを広いコミュニティに公開して一体誰が来るのかといったスリルを提供する古の配信文化と初めて当事者として向き合ってみたわけだが。そういえば配信する時も枠を立てるってナチュラルに言っちゃってるんだよね……かつて限られた生放送枠を早い者勝ちで確保しないと配信ができなかった頃の名残で、これもれっきとした古の配信文化の一部だ。アラサーオタクとしては、かつての青春の名残がちゃんと現代まで根づいていると思うと感慨深い。

さておき、実際の配信はといえば、どうせなら個別で来てくれたらいいものを、レディとロサ姉、トニシンと紅艶くんがコンビで現れたため、残り誰が来るかまったく予想できない展開に突入した。

ただ、ありがたいことに、その後もこれまでにご縁があった他箱のVやストリーマー、他界隈から歌い手さんまでひっきりなしに来ていただける結果となった。

凸待ち十組のうち残り一組まで、配信は順調に進んだ。しかし、あと一組のところで急に誰も入ってこなくなるという不可解な現象が発生。コメントと雑談を繰り広げつつ、誰も来ないまま、二十分ほどが経過した。さすがにコメント欄も俺にも焦りが滲みはじめる。

あわや放送事故か、と息を呑んだ時のことだった。ピロリン、とサーバーに誰かが入ってきた音が響いた。

配信にはまだ音をのせていない。VCチャンネルの参加者欄を確認する。絶句した。

自分の顔よりも見たアイコンと、『沙門』の文字。追い打ちをかけるように響く、甘くて優しい、聞き違えるはずのない声。

『こんにちは、聞こえますか?』

「……えっ、夢?」

爽やかな笑い声。この値千金の音が、今に限っては、俺にしか聞こえていないという事実が信じられない。「落ち着いてください、声、配信のせて大丈夫ですよ」と促され、ようやく我に返る。そう、俺はこんなでも配信者で、相手はこの道七年のプロフェッショナル。これ以上、誰に対しても、失態を晒すわけにはいかない。

「あ、え、えと……すみません、一瞬意識が吹っ飛びました。改めまして、お声をリスナーの皆さまに届けさせていただきます……恐縮です……じ、自己紹介を、いただいてよろしいでしょうか」

『はい、みなさんこんばんは、なんの変哲もない無所属個人勢Vライバー、沙門と申します。レイネさん、はじめまして、その節はどうも』

貴方様のような、なんの変哲もないVライバーがいるか。サモナー定番ツコミが脳裏を過る。やばい、今はこちらの人格をイマジナリー座敷牢に閉じ込めておかなければ。もう手遅れな気がしてならないが。

「はっ、はじめましてっ、どうしよう、ああ、どうしましょう。配信者としてあるまじき醜態を……! あ、あの、いつも、お世話になっております」

『フ……ッ、ふふ、いや、まあ身に覚えはありませんけど、どうもどうも』

「すみません、あらぬ自我が……ちゃんと後で殺しておきます」

『ころっ、プッ、危ない危ない! その発言は危ないですレイネさん、めっ、ですよ』

「ああ……ありがとうございます……」

バンバンバン、と机を叩きまくる台パンの音とともに、ノイズキャンセリングが作動するほどの大きな笑い声が響く。ああ、推しが笑っている。これが世界平和。そしてサステナブルエコロジー。愛が世界を救うかはわからないが俺の推しは世界を救う。そうに決まってる。

一応配信者としてのけなけなしのプロ意識として、コメント欄を横目に見る。一面の草と芝で、モノクロなのに青々としている。その中に紛れて、『支離滅裂な思考・言動』『様子のおかしいモス子たすかる』『召されかけて草』などというコメントが散見。そうだよ、悪いかよ。俺は人生を救ってもらったと自負する程度には重めのサモナーだ。この状況で正気なんか保っていられるか。

『アポもなしにすみません。今日友人にサーバーのURL聞き出してお邪魔したのも、どうしても気になっけることがあって。いやですね、実は僕、前々から実はちよくちよくレイネさんの歌ってみたとか切り抜きとか拝見してて。あの、三カ月前の、アペでマッチした時の切り抜きも拝見したんですね』

「ヒエッ、はっ、はい……えっ、なにこれ。すみません、沙門く、さん。ちよっとミュート失礼しますね。ねえリスナー!? どうすればいい? 私どうなるの!? ここでおしまいなのかなもしかして!!」

『参考までに、片耳イヤホンで配信聞いてますよ』

「逝ってくるねリスナー……」

いかにも弱々しい震え声で呼びかけると、ややあって、『安らかに』『さらば、全てのモンスーンバーガー』『おかしい推しをなくした……』そんなコメントが流れる。我がリスナーながら薄情な連中だ。あと誰がハンバーガーチェーンやねん。

『もしかしくなくても、僕の配信とか、見てくださったってたり、しますよね』

「あつ、ハイ、それはもう、だってV界のレジェンドじゃないですか。この界限を通る上で見ないはずがないって言うか」

『キルログに流れたアペのIDをあの一瞬で僕のものだとわかる人ってなかなかいないですよ、多分。しかも僕あの時配信外だったし』

「アツ、そうだったんですね。鳩の心配はなかったんだ、よかった」

『ああ、ご心配いただいてありがとうございます。ところで僕ね、僕のこと好きな人が大好きなんですよ』

急な角度でぶつこんできたア……！ 知ってるよ、よく配信でも公言してるもんね。だからリスナーのことも大好きだよって言ってくれるもんね……！ 好きだ。助けて。

「リスナー助けて……」

絶るようにコメント欄を見た。すると、そこは愉悦にまみれたリスナーたちによって猛烈なスピードでギョングюн回転しており、ほとんどが草コメントだった。いい加減除草剤撒くぞ。マジで。誰でもいいから俺を助ける。そろそろ推しの有効成分過剰摂取でODして死ぬぞ。明日のネットニュースになってもいいのか。

『次アペ一緒にやりましょう。キャリアお願いしますね』

「……マジですか？ いいんですか？ 終始この調子ですよ？ 放送事故ですよ」

『ンぶ……ッ自覚、あつたんですね……っ、ふははっ』

「ありますよそりや……！ あと確か沙門さん今シーズンもダイヤまで到達してましたよね？ 私あれから一切アペやらずにゴールドなのでランクマッチできないですよ」

『はい、だからちようにいいなって。来週から新シーズンですし。ね？』

まずい、沙門さんの策士なところ出てる。冷や汗が止まらない。こんな時にもコメント欄は『様子のおかしいモス子がまだまだ見れる……っつてコト!?』『神様仏様沙門くん様』『次回予告ガチで草』などという内容で溢れている。レイネのリスナーはいつもそくだ。

「キャリアなんてできませんよ……恐れ多いですよ……」

『タイマンで体力ミリの状態から僕を倒した方がなにをおっしゃいますか』

「お許しください勘弁してください」

『ンフツ、それじゃ、また連絡しますねー！ お話ししてくださいありがとうございました！』

「あつ、はっ、はい!! こちらこそ、来てくださり本当にありがとうございましたアー」

『はっい、失礼します』

嵐が去った。俺は脱力のあまり椅子から転げ落ち、強かに腰を打ちつけた。一瞬地声で呻きそうになり、本当に配信者生命が絶たれるところだった。

ああ、沙門くん、恐ろしい推し……こんな体たらくでコラボなんて、一体レイネはどうなってしまう

のか。

ほうほうの体で配信を締める。沙門くん効果もあってか、最終的に同接が五千人にまで及んでおり、再び腰を抜かすところだった。普段からこれ以上の数字を獲得し、物怖じせずば毎日配信を続けている沙門くんはやはり途轍もない豪傑だと思う。

「……さすがに、社交辞令、だよな。リップサービス、リップサービス」

ペボン、と間の抜けた通知音。VCソフトのダイレクトメッセージ着信を知らせるものだ。完全にフラグだった。

『来週木曜の二十一時から、ご都合いかがですか？』

大きく息を吸った。首を横に振る。待つてほしい。だが推しを待たせるわけにはいかない。震える指でタイピングする。いつもはしないようなタイプミスを何度も繰り返した。

『なにがあっても最優先で都合をつけます。よろしくお願いいたします』

『嬉しいです！こちらこそ、よろしく願います！』

ヒヤリと、上唇のあたりに不慣れな感触がして、咄嗟に手の甲で擦った。

見ると、鮮紅色がべっとり。視覚情報を追うように渋い鉄の味が口の中に広がって、俺は力なく笑うことしかできなかった。

包み隠さず白状しよう。この一週間、俺は舞い上がりっぱなしだった。それまでの不安を全て忘れてVになってよかった、なんて都合のいいことを思っていたくらいだ。

だって、推しに認知されて、さらには言葉を交わして、あろうことか一緒にゲームすることまで叶うんだぞ。しかも沙門くん、表に出している以上にマメな人で、配信上のNGワードや避けたい話題まで事前に共有しようとしてくれたりなんだりで、なんだかんだ毎日DMでのやりとりが続いているのだ。

こんなに都合のいい話があつていいのかと、何度も夢を疑った。つねりすぎた左手の甲が内出血でドス黒くなるくらいだった。

これほど瞬きの間に過ぎたと感じる一週間はなかった。ふとした瞬間にVCソフトのメッセージボックスを開いては、彼からのDMに即レスできるようにしていたし、毎日三時間はゲームの個人訓練機能でエイム練習をした。狂気と正気を反復横跳びして脳がフリーズドライになりそうだった。

さて、そんなこんなでコラボを翌日に控えた水曜の夜。

最終打ち合わせをしつつ会話に慣れようということになっていたため、俺は息を整えてから、招待されたサーバーのボイスチャンネルに入った。

すると時間前にもかかわらず、すでに沙門くんの話す声が聞こえて、俺はすっかりフリーズした。

緊張しすぎてろくに見ていなかった参加者欄を改めて注視する。沙門くんのアイコンと名前の下に、これまた見覚えしかないアイコンと名前が並んでいた。

「あつ、お疲れ様、です………、あの、私、時間間違えましたかね……？」

『あつ、レイネさん！お疲れ様です、間違えてませんよ！すみません、びつくりしましたよね。』

ちよつと急なんですけど色々あって……コウ、ほら』

彼がコウと親しげに愛称で呼び捨てする人など一人しか心当たりがない。ただでさえ募っていた緊張が、あんまりな不意打ちのおかげで、もはや俺一人では抱えきれないほどに膨らみ、えずいてしまいそうなほどだった。

『あ……はじめまして。コウガです。EMPのストリーマーです。よろしくお願いします』

「はじめまして……TOF所属のレイネ・モスコミュールです……えっ、Gangesじゃないですか、ドッキリですか？」

『いや違つ……いまして』

えっ、なに。どういう状況？ 沙門くんとサシだと思っていたサーバーに先客がいたんですが。しかもその先客、沙門くんとコンビ組んで色々なFPSの大会で伝説残しまくってる超有名イケメンストリーマーのコウガくんなんですが!?

コウガくんといえば、確かミドルティーンの頃からFPSゲームのプロシーンで活躍してきた、世界大会にも出場経験ありの元プロゲーマーだ。プロを退いてストリーマーとなった今も、さまざまなゲームで最高ランクを獲得しているカリスマFPSストリーマーで、現在もEMPという大手プロゲーマーチームのストリーマー部門に所属し、プロアマ混合の大会で引つ張りだこの存在である。

そして、FPSゲーム配信を主な活動としている沙門くんと極めて仲が良いことでも有名だった。一時期はほぼ毎日のようにこの二人でランクマッチを周回する配信をしまくっており、コウガくんのチャンネルでアップされる公式の配信見どころまとめ動画は軒並みミリオン再生されていた。

この二人が組んだ時のアンストッパブルな暴走や爆発力、そして発言の治安の悪さから、『Ganges』というコンビ名で親しまれており、界限ではアイドルじみた熱狂的な人気を得ていたりもする。

沙門くん推しならコウガくんを知らない者はないし、その逆も然り。二人を語る上では互いが互いに欠かせない、そんな人気タッグなのである。

もちろん俺もその例に漏れず、沙門くんの爆笑切り抜き動画には大抵と言っていいほどコウガくんの存在があるし、他では引き出せない沙門くんのガラの悪い一面を引き出してくれる人という認識で、ファンとはいかないまでも親しみ深く思っていたし、Vとなった今では、なにより尊敬の念にたえない先駆者だ。

しかし、そんな、俺にとつては沙門くん同様雲の上の存在のようなコウガくんが、どうしてレイネと沙門くんの打ち合わせに現れたのだろうか。

『レイネさん、本当に申し訳ない。急な申し出にはなるんですが、明日のコラボ、コウガも一緒にできないかな、と思つて、ちよつと呼ばせていただいたんです』

「なーる、ほど……すみません、本当にびっくりしちゃつて、あの、もちろん、一方的ではあると思いますが、コウガさんのこともよくよく存じておりまして……大人気なお二人ですから、ちよつと物怖じしちゃつてるところは否めないというか」

常に泰然自若として穏やかな沙門くんらしくらぬ心底申し訳なさそうな声を聞くと、みるみる困惑の念がしぼんでいく。推しにそんな恐縮させてしまうなどオタクの風上にも置けない。

どうフオローしたものと考えを巡らせていると、あのっ……と、いかにも気後れしつつ、それで

も勢い余ったような声がスピーカーカーを揺らした。艶やかでハリのある、沙門くんと対照的な印象の声色……コウガくんのものだ。

『一方的じゃない、です。えと、オレも、モツ……レイネ、さんの配信、見てます。めっちゃ。サモはこんな言い方しましたけど、急にお願ひしたのはオレのほうで……』

「アツ、そ、そうなんですね……！ 恐縮です……」

うわあ、サモ呼びだあ……なんかちょっと牽制けんせいされてるみたいでファンの自我がソワソワするぜ……これがGangesでえてえか……ちゃんと配信外でもこんな感じなんだな。ちょっと感動。

ところでコウガくん、レイネのこと一瞬モス子って言いかけたか？ 配信見てるって？

ヤバい、事実ならマジで恥ずかしすぎる。俺にとつてコウガくんは沙門くんの相棒同然だから、推しの身近な人に俺の演じた醜態が観測されていると思うとだいたいぶしんどいんだが。

『僕がレイネさんのことを知ったのも、コウガに共有してもらったのがきっかけなんです。先週凸待ちにお邪魔した後、ツブックスでブロックされるくらい拗すねられて』

『ちょい、待て待て、なにかも全部バラすなつて』

この二人の配信でも多々見られる沙門くんの愛あるコウガくんイジりは、配信外でも健在らしい。俺はついつい恋人たちのノロケを聞かされたような気分になり、気の引けた笑いが出た。

なるほどな、真相がわかったぞ。沙門くんのコウガくんへの愛は界限でも有名だ。基本誰に対しても柔和で優しい沙門くんだが、おおよその人に対する優しさがちゃんと水で調整したカルピスだとしたら、コウガくんへのそれは原液そのまま、みたいな感じなのである。

つまり加減がない。タガが外れている。生き別れの兄弟説が出るレベルだ。

まあ、つまり、レイネは兄弟喧嘩の仲直りのダシに使われているということだろう。まあ、そうでなくとも、誠実で良識的な沙門くんが事前の了承もなく急に誰かをVCに連れてきて、さらにはこんな要請ようせいをすることなどありえない。

そうかあ、Gangesのこういうノリつてある種のファンサだと思ってたけど、ガチなんだな……なんとというか、当事者として立ち会ってみると、ちょっと胸焼けがするというか。

うん、正直に言おう。おこがましいことこの上ないが、推しのちよつとルーズなところすら引き出せるコウガくんについて嫉妬しつとしてしまう。マジで羨ましい。コウガくんにしか見せていない沙門くんの一面なども当然あるのだろうし、それだけ沙門くんにとってコウガくんは特別なのだ。

親しみ深いし、配信者として尊敬している。憧れてもいる。でも、そんなコウガくんのことを心の底から好きになりきれないのは、そういうヘドロみたいな感情があるからなんだよな。本当に面倒くさい公序良俗に反するような厄介ファンの自我だと思うので、おくびにも出すつもりはないが。

「あ……大丈夫、ですかね……私、お二人の間に挟まって、不敬では……？ だってあのGangesですよ？ この間ヨーロッパで出たコラボ商品買いましたもん。私みたいな活動歴半年の新参者がたやすく立ち入っていい世界だとはとても……あと三百年は修行が必要のような」

『なんか……リスナーが気にするようなこと気にするんスね』

「ウツ……当事者意識が足りないですよね……ごもつともです……」

コウガくんからの何気ない、しかし痛烈な一言を食らってつい胸元を押さえる。

だって事実俺はリスナーだし。仕方ないじゃん。そもそも配信者としてやっていく覚悟を持ってこの業界に足を踏み入れたわけじゃないし。正直、今回の沙門くんとのコラボも一回限りの思い出づくりだと思ってる節がある。まあこのコラボを足がかりに、他のT O Fの子を果敢に紹介していきたいと思ってるのも確かだけど。

『コウガはこんなこと言ってますけど、リスナーの感情にナチュラルに寄り添える意識って本当に大事ですよ。活動が続ければ続けるほど薄れていきがちですし。気にしすぎて活動の幅が狭まるのは、ちよつといただけませんけどね』

あつ、最後にすっかりグサツと刺された。歴の長さが身に染みる。活動歴七年と八年の言うことはやつぱり違う。くぐつてきた修羅場の数が違うんだよな、きつと。

『オレは、配信であることはもちろんですけど、一番はやつぱりゲームを楽しみたいっていうか。心の底から楽しんでいけば、それを楽しんでくれる人が必ずいると思うんで。レイネさん、オレ、サモがいるから来たとかじゃなくて、サモとレイネさんと純粋にゲームやりたくて、無理言つてここに入れてもらつたんです』

『そうなんです。コウガつて基本受け身なので、自分からこんな風に言ってくることは滅多にないんです。無理を申し上げてことは承知の上なんです、僕からもお願いします』

うわ~~~~!! そんなこと推しに言われて断れるはずくない!? それこそ畏れ多いだろ!! 無理無理無理!! それにコウガくんが筋金入りの人見知りで基本受け身なのは、彼の活動を見ていれば嫌でもわかる。彼が積極的に誰かになにかを働きかけたところなど、それこそ一度くらいしか見たことがな

い。沙門ちゃんとコウガくんの出会いが、まさしくそれだった。

マジでなぜ。どうして栄えある二回目^はがレイネに發揮されてしまったのか。その熱意は一体どこから来る? もしかなくても、沙門くん絡みだからか? いや、そうか。そうに違いない。

きつと沙門ちゃんとレイネが絡むにあたって、なにかしら不審なものを感じたから、居ても立つてもいられず口を出してきたのだ。おそらくこれはコウガくんによる監査。ならば、俺はどこまでも弁えたオタクであると示すまで。

「……すみません、お二人にそこまで言わせてしまつて。歴は浅いですが、責任ある活動者として、これ以上お二人に失礼を働くわけにはいきません。僭越ながら、コラボの件、謹んで承諾させていただきます。よろしくお願いいたします」

『ああ、よかった……! ありがとうございます、レイネさん! こちらこそ、よろしくお願いします!』

安堵感^{あんど}がひしひしと伝わってくる、吐息まじりの沙門くんの声がニクい。そんな垂涎の美声で感謝なんかされたらどんな要求でも呑んでしまいそうだ。連帯保証人? なるなる!

先ほど胸元を押さえた手をそのままに、ドクドクとうるさい鼓動を宥めるように左胸のあたりをさする。そういえば、さつきまで熱心だったコウガくんがやけに静かだ。沙門くんもそう思ったのか、「コウガ、レイネさんオッケーだつて、やったじゃん」と声をかける。

『……ッ、マジっすか!? うわ、本当すみません、ありがとうございます!! マジ途中テンパりすぎて泣くかと思つた……一生のトラウマになるところだつた……』

「どういことですか……？」

『や……自分から無理言ってお願することとかマジでなくて……個人的にデッドオアアライブの大博打だったっていうか……オイそこ笑うな、人の一世一代を笑うなサモ野郎お前』

アツ、さつきからやたらノイキャンかかった音がすると思ったら沙門くんの爆笑する声だったのか。なるほどな。いやずつと笑ってるじゃんこの人。配信でもなかなか見ないレベルだろこれ。

改めてコウガくんパワーすごい。さすが存在自体が沙門くんのツボと謳^{うた}われるだけある。

『ンハハッ！ ゲホ、ゴホッ、ブツ、フフ……ッ、ごめ、マジで、よかったなコウ……声震えすぎお前……エヘッ、ハ……ッ……ッ、ヤバ……面白すぎッ……ンヘハッ』

『人間誰もお前みたいなコミュ力ブレターだと思ふなよ……』

『でもコウだってネット弁慶^{べんけい}でしょ。いつものイキり千枚舌どこやったのさ』

『ネット弁慶とか言うな、事実陳列罪^{ちんれつざい}やめろ、訴えるぞ』

「ああ、事実ではあるんですね……」

変なところ素直で面白いなと思い、ついこぼれた呟^{つぶや}き。

ブツ、と噴き出す音が聞こえた。先ほどからずつと沙門くんのアイコンがチカチカしている。我が推しながら、こんな調子で明日の配信は大丈夫なのだろうか。コウガくんもなんだか普段の配信で見せるクールさがどこかへ吹っ飛んでいるような気がするし。

『やっ、あの、違います。詐欺です。オレの言うこと信じないでください』

「……ッフフ、あ、そう、ですか。サイトを見てたら急に登録料請求されて裁判になるって脅^{おど}されても、

りんこのカードは買っちゃダメ、と……」

『あつ、そうスね。わざわざコンビ二行くのダルいし。課金はクレカがいいと思うっス、ハイ』

「……コウガさん一体どうしちゃったんですか？」

『へっ？』

再び沙門くんがノイキャンの海に沈んでいった。微^{かす}かに台パンの音まで聞こえてくる。これ配信外マジか。さてはこの二人、これが通常運転だな。すげえや。まさしく天性のバディだ。こればかりは厄介ファンの自我も認めざるを得ないぜ。

『ゲホッ、ゲホ……ッ、あ——、頭痛い。どうしよう、今から密林で酸素缶注文したら明日までに届きますかね？』

「そんなにですか」

『もう明日の配信が怖いです。僕壊れちゃうかも』

『人のこと笑いものにして楽しいかよ』

拗^こねた声色で悪態を吐くコウガくん。やはり彼はひねくれているように見えて根は素直だ。そういうところが沙門くんの心を掴んで離さないのかもしれない。

『ごめん、コウ。マジで楽しい。マジで』

『お前はそういう奴だよな……』

今度はこちらが思いっきり噴き出す番だった。ガチトーンで認める沙門くんも、しみじみ諦^{あきら}めるコウガくんも面白すぎる。味わい深いとはこのことか。

『そうだ。事前に一つ謝っておきたくて。オレ結構ノリで人のこと変なあだ名で呼ぶことあるので、不快に思われたらすみません』

「あ、全然大丈夫です！ モンスーンバーガー以外の呼び方であれば、なんなりと呼んでください」

正直コウガくんからどんな特殊なニックネームが飛び出してくるのか興味があつたりするので、これに関しては大歓迎だ。中には秀逸でセンスの光るものもあり、次はどんな発想が飛び出すのかと、コウガくんの名づけは密かな楽しみとしてファンに受け入れられているのだ。

『レイネさん、コウガにそんなこと言ったら、僕みたいにサモとかサモさんとかサモンヌとかサーモンとか鮭野郎とかキリミとか散々な呼び方されますよ』

「フフ……ッ、呼び方をまとめた切り抜きとかありますよね。あれ何度も見ました」

『そんなあるんスか!? 何度も見ないでくださいよ、ヤバ……恥ず……』

顔を両手で覆ったのだろう、くぐもった声。

キュウ、と腹の上のあたりが疼くような感覚がして生唾を呑む。実際に接してみると、配信で見る以上の愛嬌を感じてたまらない。なるほど、これが登録者百万人超えのカリスマか。

『理解ある推しでよかったね、コウ』

『覚えとけよアトランティックお前』

「くふッ……サモン・アトランティック……ふふ」

『ダハハ!! アハハハハッ、グフッ、それヤバイ! モッさん最高! サモン・アトランティックさんッ、アッハハハハハ!!』

『あのさあ……勝手にラストネーム錬成しないでよ……』というか、それ配信でやってよお』

とまあ、こんな調子で、打ち合わせは気づけば日付を越えるまで続き、と言っても三人のとりとめのない雑談がひたすら盛り上がったただだったが、おかげでなんとなくこのメンツでの配信のテンション感を掴むことができたのだった。

何度か咳払いして声のトーンをチューニング。小手調べに、配信入りまゝす、と一つ声かけ。すると、すかさずコウガくんが『はい配信一丁』と返してくる。やっぱ悔しいけど天才だと思うこの人。

スマホでコメント欄をチラ見。配信待機時間の時点で凄まじい数が集まっていただけに、流れが今までにないほど速い。今回は各々に配信の枠を取っていて、普通に沙門くんやコウガくんのほうに人が流れると思っていたので、今更プレッシャーを感じるなどした。

『まさかのGangesとコラボ』『楽しみだけどモス子大丈夫かこれ』『コウガくんまで来るとは思わんやろ』……こればかりはリスナーに同意だ。配信中、終始口を開けないままであるぞ。

『やるぞやるぞ』
『うい〜』

配信に声が入っての第一声は、沙門くんによる肩の力の抜けるようなゆるっとした掛け声と、それに呼応するコウガくんの返事だった。彼ら二人がそろった時特有の、どこまでもリラックスした等身大の